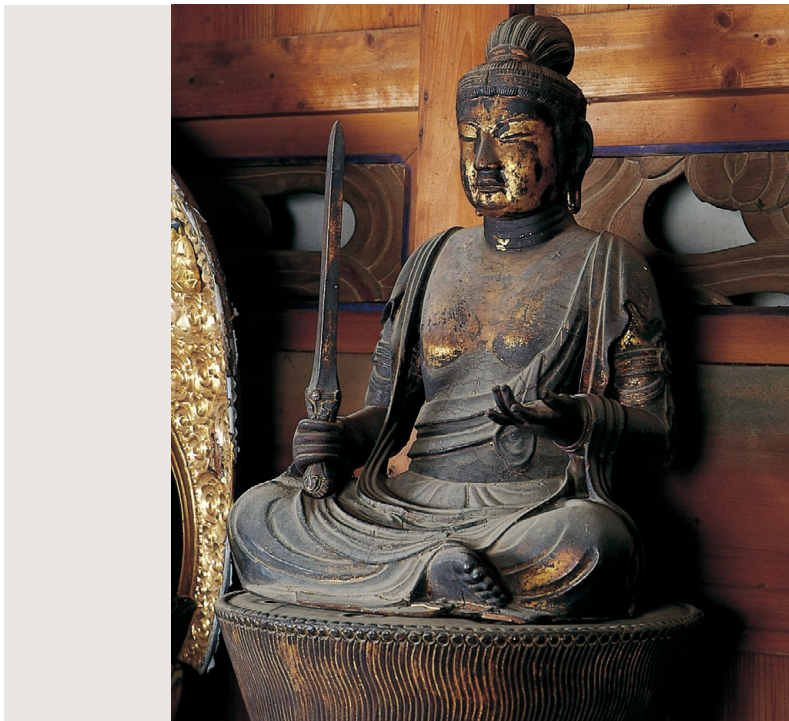




木心乾漆虚空蔵菩薩坐像

一軀

指定 昭和三十一年六月二十八日

所在地 いわき市常磐西郷町忠多

所有者 能満寺

奈良時代(八世紀)

像高 六一・五cm

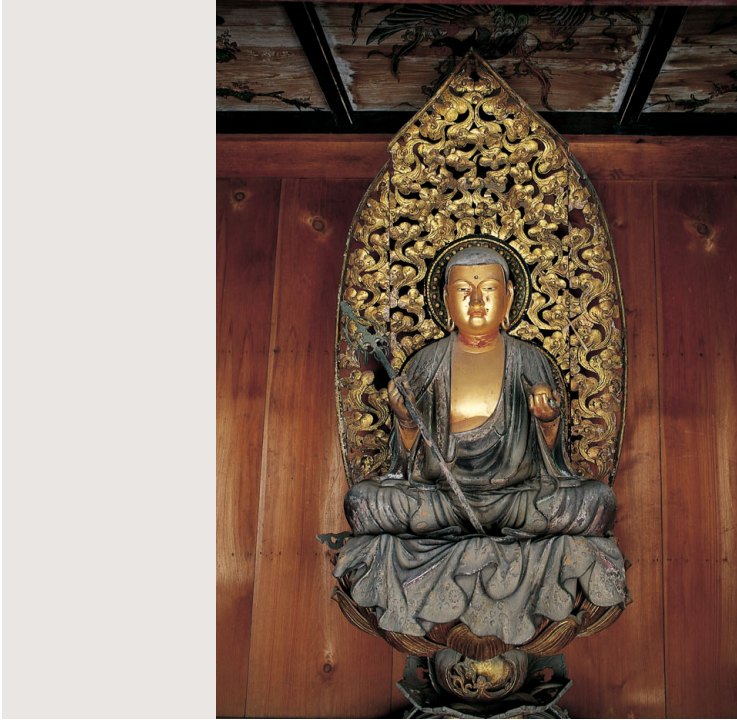
能満寺の虚空蔵像は、五重の八花形の台座に趺坐し、細かく櫛目を入れた大きな宝髻を高く結び、地髪に食いつた眉目、幅の広い天冠台が共彫りされている。ややつりあがった眉目、直線にのびた高い鼻稜、豊かな頬、下唇が小さく引き締まって、口元にはかすかに古代微笑をただよわせた容貌は、優しさの中にも尊厳さを秘めている。

衣文は半裸に近い上体に、乾漆特有のやわらかな表現で穏やかに整えられている。がっちりした両肩から胸部へかけての肉付きも、張りのある豊かさを示している。なお、両手首・裳先・台座は後補であり、右手に利剣、左手に宝珠を持っていたが、現在宝珠は失われている。

木心乾漆像とは、像の大体の形を木彫りにして、その上に木屑を盛って仕上げる技法で、奈良時代に盛んに行われた造像技法である。

数少ない典型的な木心乾漆像で、檜材を用いた一木造り、膝前は別材(後補)を削ぎ、胎内を円筒状に内削りし、背面中央で縦に細く地付きまで背板をはめている。両手は上肘部で削ぎ、両手先は後補である。

もとは奈良の東大寺にあったものを、小泉三甲策太郎を経て、昭和二十年(一九四五)、能満寺に施入された。



木造地藏菩薩坐像
(附) 像内納入品

一 軀

指 定 平成二十五年六月十九日

所在地 いわき市小川町下小川字上ノ台

所有者 長福寺

鎌倉時代(十四世紀)

像高 六九cm

小川山長福寺は真言律宗に属する西大寺の末寺で、元亨二年(一二三二)に小河義綱の帰依により、鎌倉極楽寺内地蔵院の慈雲和尚によって開山されたといわれる。奥州における真言律宗の中心道場であったが、その後、慶長八年(一六〇三)、同十四年・同十五年と三度の火災により、七堂七院十二坊がごとごとく炎上して衰退したといわれている。

地藏菩薩は釈迦入滅ののち、弥勒仏が五六億七千万年ののちに出現するまでの間、すなわち無仏のときに出現し、六道の衆生を救済する菩薩であるといわれている。六道済度のために六つの分身を作り、六地藏として崇敬されている。

この長福寺の本尊である地藏菩薩坐像は、寄木造りで彩色が施されており、眼は玉眼で、左手に宝珠、右手に錫杖をもち、六地藏中の大定慈悲の形に造られている。尊顔は髪際線が額中央で下方にカーブし、切れ長の伏せ眼、きりりと結んだ口唇、張りのある紐耳をしている。衣全面に大きな菊花の土紋がみられる。土紋とは、粘土を花や葉の雛型に入れて厚手に作った文様である。また、裳裾先が反転して垂下する垂下様式をとっている。

このような彫刻様式は、中国宋朝後期の影響を受けた鎌倉末期から、室町初期にかけての特色をもつものである。おそらく鎌倉極楽寺との関係から、極楽寺より贈られたものと思われるが、面相や造りは、鎌倉円覚寺塔頭伝宗庵の地藏菩薩坐像鎌倉末期、南北朝時代、国指定に類似するところがある。



厨子入金銅宝篋印舍利塔

一基

指定 昭和三十六年六月三十日

所在地 いわき市四倉町薬王寺字塙

所有者 薬王寺

鎌倉時代(十四世紀)

厨子高 二二・八cm、厨子幅 一五・六cm

塔高 一〇・五cm

春日厨子の中にはめ板を立て、これに鏡を装填した金銅製宝灰印塔をおさめている。厨子は黒漆塗りで、扉の内側には金箔を押ししている。厨子内のはめ板も漆箔を施しており、下に銅製框座をおき、束を二本立て、格狭間を付けている。

宝篋印塔は塔身に大きく円相を彫り、覆輪を付け、水晶を薄く研いでガラス状にして装填し、内に透し彫りの梵字「𑖀」を配している。この「𑖀」は胎藏界大日如来をあらわす。塔の台は二段式で下段には大きく格狭間を造り、水晶板をはめて、その中に舍利と木造の小地藏立像を入れる。塔の屋蓋は軒がやや反り返り、上に四段の階を設け、馬耳型の方立てを立てる。その上にさらに請花・相輪・宝珠等を配している。屋蓋と方立てには唐草文様を浮き彫りにし、塔身・台座には魚子を打っている。また塔の最下部には反花蓮弁を付けている。

この宝篋印塔を装着する鏡には菊花双鳥文鏡を用い、紐の孔の方向と一致させて上下に二つの孔を設け、ここに宝篋印塔の柄をはめ、上から下へ串状の銅線を通して固定している。鏡は鎌倉時代の和鏡で、宝篋印塔は鎌倉時代後期の作と考えられる。

薬王寺は中世に一時衰えたことがあったが、室町時代初期に岩城隆忠は、真言宗の意教流願行方を学んだ鏡祐(厩璣市)から招き、文安三年(一四四六)に同寺を再興した。鏡祐が布教に下るとき、師僧より授与されたのがこの厨子入金銅宝篋印舍利塔で、それ以来代々の住職の晋山式に伝授されている宝器である。



大薙刀 一口

銘 備州長船住盛景 貞治二年十一月日

指定 昭和四十九年六月八日

所在地 いわき市平字八幡小路

所有者 飯野八幡宮

南北朝時代・貞治四年(一三六五)

身長 一三〇・五cm

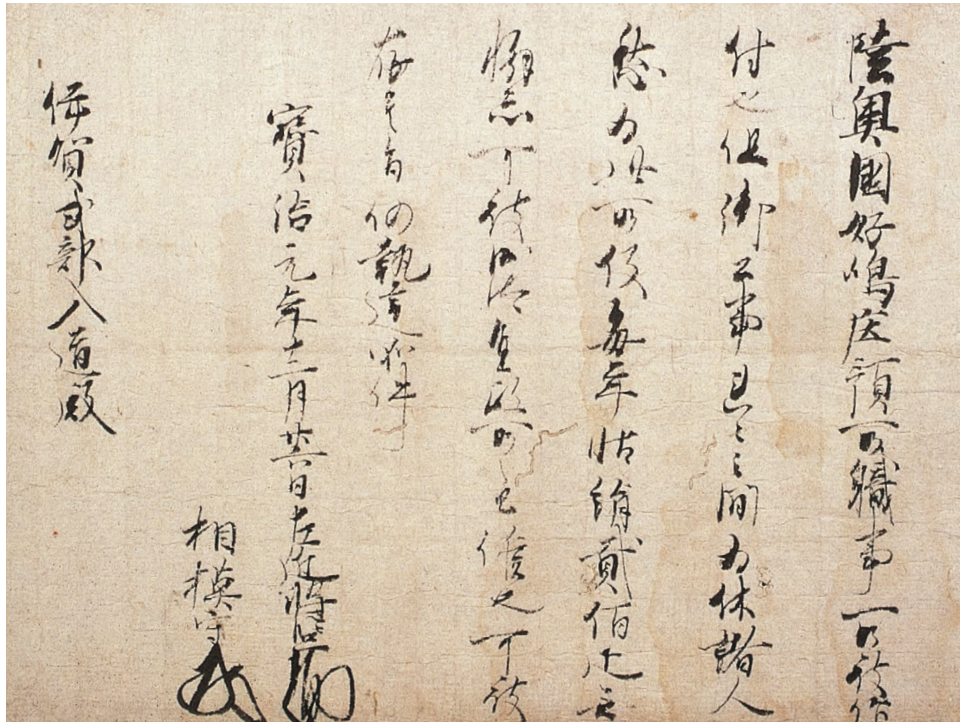
反り 六・五cm

盛景は大宮盛景といつて備前国(岡山県)大宮に住み、相伝備前の作風を伝えて、南北朝期に活躍した刀工である。この時代に流行した大薙刀の典型的作例で、当時の薙刀で健全な姿で残っているものは数振といわれ、貴重な逸品である。

この大薙刀は薙刀造、鍛えは板目、刃文は丁子直刃、彫物は薙刀樋添樋付、目釘穴二個、拵がある。

飯野八幡宮は文治二年(一一八六)石清水八幡宮(京都府)の分霊をうつした神社で、好島庄の総鎮守であった。伊賀氏(飯野氏)は宝治元年(一二四七)以来好島庄西の預所となり、飯野八幡宮の神主を兼ねていた。伊賀氏は好島庄の外に備前国にも地頭職を受けており、伊賀盛光の所持品と伝えられる。

また、この大薙刀には黒塗の鞘がつき、柄は黒の千段巻、銀金具付、石突の上部は黒塗で銀の胴がねを着せ、石突は鉄製で平鍛治町の刀匠・和泉守国虎系の根本伝三郎が貞享三年(一六八六)八月に寄進したものであり、石突にその銘が刻まれている。



飯野家文書

一、六八三通

指定 平成六年六月二十八日

所在地 いわき市平字高月

所有者 個人

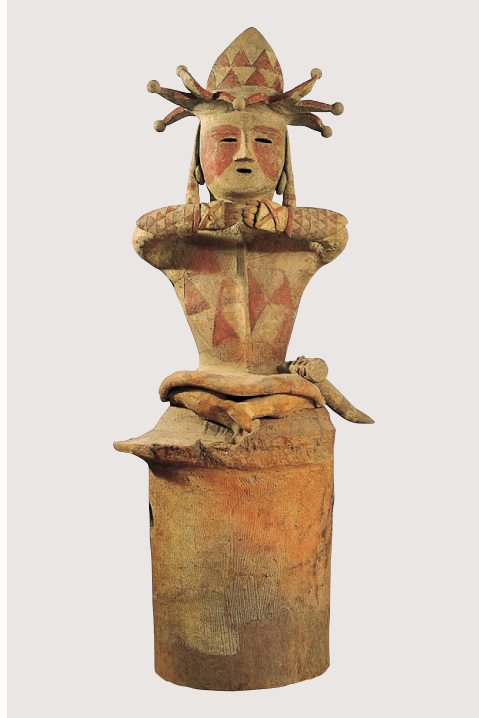
鎌倉時代・明治時代

飯野家文書は、鎌倉幕府政所執事の伊賀光宗を祖とする飯野八幡宮宮司・飯野家に伝来する鎌倉期から明治初期にいたる文書で、総数一、六八三通で構成される。

このうち中世文書は二一〇通。国学者大国隆正の言を容れた飯野盛容によって、明治四年（一八七二）の頃、一七八通が九巻の卷子に装丁され、そのほかは未成巻のまま秘蔵された。

その内容は、関東下知状など好島荘の相論に関するもの、南北朝期の足利尊氏・同直義感状など武将としての伊賀氏の動向に関するもの、飯野八幡宮縁起注進状案・飯野八幡宮鳥居造立配分状など八幡宮に関する文書に大別される。これらは鎌倉期の好島荘の状況を明らかにし、南北朝の動乱期における伊賀氏の活躍を伝えており、あわせて奥州管領の権限をもうかがわせる。また、室町期から戦国期にかけての、岩城氏の大名化の過程を示す資料でもある。江戸時代には、新井白石がその著『藩翰譜』に引用している。

近世以降の文書は、八幡宮の縁起や由緒、祭礼、飯野家の家譜や系図、日記、将軍家からの朱印状、磐城平藩歴代藩主の寄進状、所領や年貢、神社経営と供社寺、書状、絵図、内藤家時代に奉納された和歌や俳諧など、広範囲にわたっており内容も多彩である。また、明治初期に置かれた磐前県中教院関係の辞令や御触書、通達、願書、社寺明細なども含まれている。



埴輪男子胡坐像

一 軀

(附) 埴輪女子像

一 軀 埴輪跪坐像残闕等

指 定 昭和三十三年二月八日

所在地 いわき市平字高月

(福島県立磐城高等学校)

所有者 福島県

古墳時代(六世紀前半)

総高 八九・四cm

神谷作一〇一号墳より出土した。頬紅をつけた端正な顔だち、三角形の天冠をつけ、七つに枝分かれた鈴付きのまびさしが、風にゆれ動いて鈴の響きが聞こえてくるような表現がこの男子像の美的評価を高めている。

美豆良を長く垂れ、左腰に玉飾りの刀をはき、軛を結んで籠手をつけた両手を前に捧げ台上に胡坐する。六世紀前半の制作で、古墳時代後期の首長の葬祭に際して、威儀を正して亡き首長の霊前に拝礼する若き後継者の緊張した雰囲気をよく表現している。

女子像はつぶし島田の髪飾りで、首と手に玉飾りをつけ、腰には四鈴鏡をさげている。長い裾を引く裳をまとい、右肩から左脇に巾広いたすきをかけ、両手を前に捧げている。

男子跪坐像は下半身を欠損しているが、残存部の姿勢から容易にひざまずく姿を想像できる。わが国で数例しか知られていない貴重な埴輪で、亡き主に拝礼する者達の思いが動的に伝えられている。

このほかに武人男子像・飾馬・ゆぎ・さしば・家など十二体以上の人物埴輪の破片がある。円筒埴輪を合わせて海岸砂丘の真白い砂山上に営まれた埴丘を飾り立てたものである。昭和二十三年(一九四八)十二月発掘。



御宝殿の稚児田楽・風流

指定 昭和五十一年五月四日

所在地 いわき市錦町御宝殿

保存団体 御宝殿熊野神社田楽保存会

平安時代末期に立荘された菊多荘の総鎮守であった御宝殿熊野神社の祭礼に行われる田楽・風流は、鎌倉時代に全国で流行した遺例である。

現在、祭りは七月の第三月曜日、及び前日の日曜日に行われ、農作物の豊凶を占う「おほこだて」、豊作祈願の稚児田楽「ざらっこ」、豊年感謝の風流「鷺舞・鹿舞・龍舞・獅子舞」があるが、古くは六月十四・十五日であった。

「おほこだて」は、五m程の孟宗竹二本を根付きのまま掘り取り、それぞれの先端に赤地に黒の鳥と、白地に兎を描いた紙張り太鼓を取り付け、兎を山方、鳥を海方とし、祭りの朝に大鳥居の脇に立てこれを振り分け旗の合図で倒し、本殿の前に建て替える。山方と海方とがどちらが早く立てるかを競い、早く立てた方が豊作になるといふ。

稚児田楽は八人の童子により行われ、うち二人は露払いで、ほこ竹を九〇cm程にしたものを持ち、浴衣に白足袋で背に「二つ巴」の社紋を染めた上衣を羽織り、黒い烏帽子をかぶっている。「ざらっこ」は、一八cm程の細い檜板を三〇枚ばかり麻糸で通したささらを鳴らし、露払いと同じ服装でニツ折の板笠をかぶる。

舞には総巡り・親と子の取り換え・列の組み打ち・二列の組み打ち・親は親、子は子などの一〇種目がある。嘶子方は笛と太鼓で、この嘶子方の太鼓の胴打ち「カッカ」、真打ちの「ドン」と、笛のリズムで動かため、「カッカドン」といふ。

豊年を感謝する風流の舞は、白装束の縫いぐるみを着た若者が頭に箆細工の鷺・鹿・竜・獅子の頭をかぶり樽の上で踊る。



甲塚古墳

指定 大正十二年三月七日

所在地 いわき市平荒田目字甲塚

管理者 いわき市

古墳時代後期(六世紀後半)

甲塚古墳は、夏井川河口に近い沖積地に築造された径三七m、高さ約八・二mの円墳である。比較的良好な墳形を保ち、沖積地にあるため古くから注目され、国指定の史跡に指定された。甕を伏せたのに似ているところからその名で呼ばれ、かつてクロマツの巨木が墳丘をおおい、どの方向から見ても同じに見えるところから「八方にらみの松」といわれ、実に堂々として、水田にうつる姿はみごとであった。しかし、現在は枯れはててしまい、墳丘だけが孤立している。

未だ考古学的な調査が行なわれていないので、内部構造も築造年代も明らかでない。言い伝えによると周辺にもいくつかの古墳があったが、耕作により湮滅したという。付近には古墳時代前期から奈良・平安時代の遺跡が色濃く分布している。

国道六号常磐バイパス工事に伴う発掘調査で、九基の古墳の跡、一五〇棟の掘立柱の建物跡、祭祀の溝などから、土師器、円筒埴輪、木器、木簡など豊富な遺物が掘り出されている。西南の丘陵下に鎮座する延喜式内社大魂神社の存在とともに、甲塚古墳の歴史的な環境は歴史の宝庫にふさわしく充実している。

市内の沖積地に立地する古墳には、金冠塚古墳(県指定・錦町)、五里内古墳(平下荒川)、塚前古墳(小名浜林城など横穴式石室をもつものがあり、甲塚古墳も後期古墳時代の六世紀後半ごろの築造と推定される。



白水阿弥陀堂境域

指定 昭和四十一年九月十二日

所在地 いわき市内郷白水町広畑・大門

管理者 いわき市

平安時代末期(十二世紀)

面積 二四三、六六九㎡

白水阿弥陀堂境域は、北・西・東三方の丘陵々線と、白水川を境界線とする範囲が指定区域である。北山頂に経塚山、西に朝日滝、東に夕日滝を配し、参道中央の大門跡で内・外院に区切られる。外院の東に小御堂跡、中央に中の坊跡、西に大坊元禄年間に願成寺となる)があった。内院には、平安時代末建立の阿弥陀堂(国宝)、南に中島と東西にひろがる池を配置する。

昭和三十七年(一九六二)、東西池の汀線・石組・洲浜・中島にかかる橋跡が確認され、浄土式庭園の全貌が明らかになった。同四十三年(一九六八)以降、周辺土地の公有化と庭園の復元整備事業が施行され、十二世紀の創建当初の姿に再現された。

十一世紀頃から、釈迦入滅二千年後は世が暗黒の世界になるという末法思想が普及し、王朝貴族は西方浄土の光明を求めて阿弥陀堂を建て、浄土に往生することを願った。白水阿弥陀堂浄土式庭園もこの様な思想的背景によって造営され、經典の説く理想をこの世の地上に具現したものと考えられている。

平泉の毛越寺庭園・観自在王院、京都宇治平等院などが代表的遺構として有名であるが、建造物と庭園が創建当初の姿を完備しているものは少ない。

白水阿弥陀堂境域の場合は、お堂の建造物と浄土式庭園が健全な例であり、加えて自然空間とそれを取りまく環境がよく保持されており、平安時代後期の仏教文化と相まって、すばらしい効果を発揮し、感動を誘っている。いわきばかりではなく、わが国の十二世紀を代表する浄土式庭園の一つである。



中田横穴

指定 昭和四十五年五月十一日

所在地 いわき市平沼ノ内字中田

管理者 いわき市

古墳時代(六世紀後半)

海岸から一・二kmの丘陵崖下に構築された横穴墓で、昭和四十四年(一九六九)、県道新設工事中に発見された。複室を有する特殊な構造をもち、奥室周壁に三角形の赤白の文様が三段に描かれている。我が国を代表する装飾横穴墓の一つである。入口から奥室壁まで六・六七m、奥室幅二・八m、高さ二・二九m、隅丸方形プランでアーチ状の天井となる。前室は奥室より小さく入口の幅も狭く、排水溝と閉塞施設のための溝がある。

三角形の文様は一辺四〇cm前後で、輪郭線は陰刻されている。上段は赤色の倒立三角形、中段下段は正位の三角形で、下段の頂点が中段の三角形の底辺中央に接するように配列されている。白色は奥壁の上段中段のみで側壁には見られない。入口上部にも二本の弧線と、その間に赤の三角形を並べその下に四つの三角形を描いている。

我が国最大という金銅製馬鈴(ばれい)、装身具三八五点、武器武具七四七点、馬具一六九点、その他、珠文鏡(儀鏡)、青銅製鏡の蓋など、横穴入口直下に設けられた特殊な祭壇と内部から豊富な副葬品が出土した。出土品の多くは六世紀後半の我が国の古墳文化研究と、横穴墓の基礎的概念を大幅に書きかえる要因となった。東国の古墳文化研究上重要な遺跡である。



根岸官衙遺跡群^{ねぎしやがいまへん}

一四五・一一五・八六㎡

指定 平成十七年七月十四日

所在地 いわき市平下大越字岸前・石田・根岸・根廻・

上ノ内作

いわき市平藤間字中之内・トウボウジ

所有者 いわき市ほか

七世紀後半～九世紀

根岸遺跡はいわき市平下大越及び藤間地内に所在し、夏井川河口近くの右岸丘陵上に位置する。根岸官衙遺跡の北方にある夏井廃寺が古くから知られており、その後、昭和四十八年に根岸遺跡が発見された。発掘調査の結果、七世紀後半から九世紀に至る磐城郡家跡であることが判明し、夏井廃寺と併せ、一四四・五三五㎡余を根岸官衙遺跡群として国の史跡に指定された。

根岸遺跡は政庁跡、正倉院跡、居館跡等からなり、中心となる政庁は北辺中央に正殿、両わきに脇殿を配置し、中央の広場と併せ、一辺六六m以上の堀で囲まれている。正倉院は北群と南群に分けられ、穀倉や管理棟と思われる建物が並んでいる。居館は大型の竪穴住居と付属する建物群があり、首長層か郡司級の居宅、もしくは館の施設と考えられる。これらの建物は礎石建物、掘立柱建物、竪穴住居と用途により分れており、いずれも規模において群を抜いている。

夏井廃寺は根岸遺跡の北方にあり、東西九六・三m、南北一一・五mを溝で区画し、金堂跡、講堂跡、塔跡が配地され九州の観音寺式と考えられている。観音寺式の伽藍配置は郡山廃寺や多賀城廃寺にも見られ、共に国府に付随する寺院と想定されていることから、夏井廃寺も同様の性格を持つものと考えられている。発掘により複弁六葉蓮華文、複弁八葉蓮華文、複弁四葉蓮華文などの軒丸瓦や、これと対になる重弧文、均整唐草文の軒平瓦が出土し、これらの瓦は夏井川上流の梅ノ作瓦窯跡群で製作されたことが確認されている。根岸官衙遺跡群は、いわきの古代を語るうえで極めて重要な遺跡である。



なかまど
中釜戸のシダレモミジ

指 定 昭和十二年六月十五日

所在地 いわき市渡辺町中釜戸字表前ほか

管理者 いわき市

このシダレモミジは、中釜戸の観音堂境内にある。大小二本の巨木は樹幹がねじれ曲り、コブがつき、曲折した中小枝はことごとく枝垂れ、大きな洋傘状のみごとな樹冠をつくり、四季さまざまに変化する趣は特有の景観をかもし出している。

大株の樹高六・八m、胸高幹回り三・五m、根回り二・七五m。小株は樹高四m、胸高幹回り八〇cmで、両株とも樹種はイロハカエデである。

自然落下した種子からは正常形と枝垂れ形が生ずるが、枝垂れの個体が少ないという。従って、枝垂れ形質は遺伝的に固定したものではなく、突然変異によって生じた奇形木と考えられ、植物形態学的、遺伝学的資料として貴重である。植栽自生の区別ができず、樹齢も不明である。

紅葉期は昼夜の温度差が少なくと一斉に紅葉しない。紅葉に緑が混ざるのも趣がある。

イロハカエデ(カエデ科)

古来モミジの名所は、京都郊外の高雄とされてきたのでタカオモミジともよばれる。樹高一五mになる木で樹皮はなめらかで、葉は互生で幅は四〜七cm、深く切れこみ五〜七裂、葉緑にふぞろいの鋸歯があつて、大鋸歯の中に小鋸歯がまじる。花は四、五月頃で十月に結実する。

分布は、東北地方南部から台湾・中国東部・朝鮮半島南部におよぶ。また、岩手県からの記録があるが、植栽されたものと言われている。いわき市では平地丘陵地に多く、陽樹で溪谷などに多く生育する。樹陰では生育がよくない。



賢沼^{かしなま}ウナギ^{うなぎ}生息地

指定 昭和十四年九月七日

所在地 いわき市平沼ノ内字代ノ下

管理者 いわき市

平沼ノ内地内の丘陵地に賢沼がある。周囲の丘陵地から賢沼に集まった水は、水路を通って弁天川へ落ちる。沼は文部科学省の所有になっている。

面積二一八アール。沼の北側に賢沼寺密蔵院弁天堂があり、その浮御堂の床下でコイに混じってウナギを見ることができ

る。
殺生を戒める弁財天信仰とも結びついて保護されてきたこともあり、以前は大人の腕ほどの巨大ウナギが見られたが、今は普通の大きさのウナギが少し見られる程度である。

ウナギが淡水に棲むのはシラスウナギ幼生(体長六㎝)以後のもので、産卵時期には降海回遊するのが一般的である。賢沼のウナギも川を遡ってきたものと思われる。また、成魚は保護されて巨大化し、一生をこの沼で過ごしたとも考えられる。

国の天然記念物のウナギは、賢沼と岐阜県粥川のもものは普通の日本ウナギであるが、他に別種のオオウナギが指定になっているところもある。

ウナギ(ウナギ科)

ウナギは背びれ・尾びれ・しりびれは連続し、腹びれはなく、体には斑紋がない。オオウナギには褐色の斑紋がある。日本ウナギの産卵場は、マリアナ海溝と推定され、レプトケファレス幼生になって海流にのり、日本近海に近づく。変態したシラスウナギ幼生は一月から五月下旬ころまでの間に、川を遡って小川や沼に入る。夜行性で昼は物かげに静止して動かない。



照島ウミウ生息地

指定 昭和二十年二月二十二日

所在地 いわき市泉町下川字大畑

管理者 いわき市

照島は小浜町と泉町下川字大畑の境界付近にあって、海岸から約二五〇m離れた第三紀凝灰質砂岩の断崖絶壁の島である。元来この島は、対岸と陸続きであったが、波浪の浸食作用で島になった。高さは対岸の崖と同じく約三一mである。以前島の南側に海蝕洞があったらしいが今はなく、近年崖が崩れて小さくなっていく傾向である。島の頂上の植物を双眼鏡で観察すると、トベラ・マルバグミ・ヒサカキの低木やハマギクが繁茂しているのがわかるが、年々少なくなってきた。

照島には十一月中旬にウミウ・ヒメウ・アビ・ウミスズメが飛来し、翌年四月中旬から五月上旬にかけて北方へ帰る。渡来時期とカタクチイワシの回遊が一致しているのは興味がある。ウミウは毎年、この島で産卵しているとは限らず、むしろ産卵しない年の方が多い。羽化しても数羽程度であり、それはウミウの太平洋側での繁殖南限に近いものと考えられている。体力のない鳥は通年照島で過ごす。

鵜の日周活動は日の出とともに始まり、昼間は採餌行動が二kmから六kmにおよぶ。日没頃に帰島をはじめ、暮色せままって帰着する。大型のウミウは見晴しのよい島の頂上部に、小型のヒメウは垂直な崖面に止る。

ウミウとヒメウ(ウ科)

ウミウは翼長三・四mになる大型の黒い海鳥で、繁殖期の翼は藍色、雌雄の区別はできない。幼鳥は褐色で、顔・喉の裸出部は白い。ウミウの白色部はカワウの方が広く、ヒメウはほとんどなく体全体が黒い。ウミウの繁殖地はシベリア沿岸から北海道・東北地方北部にわたるが、ヒメウはさらに北のカムチャツカ半島方面へ広がる。



沢尻の大ヒノキ(サワラ)
さわじりのおおひのき

指 定 昭和四十九年八月十日

所在地 いわき市川前町上桶売字上沢尻

所有者 個人

沢尻の大ヒノキは、樹高三四・二八m、胸高幹回り九・五m、樹冠南北約二〇mの大木で日本最大のサワラである。本樹は、南に開く地形のなだらかな階段状田畑の中に立っている独立樹で、樹勢は盛んである。周囲に樹木がないため枝が良く繁り、伸びた枝は自重で垂れさがり、南と北の枝は地面に接触している。

主幹は途中から二分し、梢が二本になっている。樹皮は縦裂して深い切れ込みとなり、この上にツルマサキや巨大なキズタがからみついていて、推定樹齢約八百年といわれている。

本樹の名称は「ヒノキ」であるが樹種は「サワラ」である。

サワラ(ヒノキ科)

日本特産の針葉樹で、自然分布の北限は岩手県北上山地、南限は島原半島である。ヒノキが山の中腹から尾根にかけて生息するのに対して、サワラは中腹から下の谷筋に良く育つ。老木の樹冠はヒノキが卵型または円柱形なのに対して、サワラは円錐形になる。樹皮は灰褐色でヒノキより灰色が強く、せまく縦裂する。葉はヒノキより小形で、ヒノキが鱗片状葉で先のとがらないのに対してサワラはとがっている。白色気孔線がY字形しているのがヒノキで、サワラのそれは二個で葉の下面は白く、ときにX字形になる。雌雄同株で四月開花、球果はヒノキより小さく、六〜七mm。ヒノキの自生北限は本市の関ヶ原(かたがはら)であると考えられている。